

NEWSLETTER of
the Japanese Society for Applied Animal Behaviour No.8
April 2007

◇ 2007年度春期研究発表会報告

副会長(大会委員長) 上野吉一(京都大学霊長類研究所)



応用動物行動学会・日本畜産管理学会合同大会として、2007年3月28日(水)に第4回目の応用動物行動学会春期研究発表会を麻布大学において開催された。発表演題は8題(全体で31題)であった。発表会自体は、非常に熱気漂う活気のあるものであったが、1つ気に掛かる点がある。発表演題数の減少である。一昨年が15題、昨年が11題、今年は8題と減少は急激で、一昨年の約半数となった。この原因の1つは、申込み手続きの周知の不備がある。これは、担当者として責任を感じている。幹事会において、日本畜産管理学会との情報のやり取りをもっと円滑にする手だてを当学会として考えて欲しいということを申し入れた。次回は、この点は改善できるものと期待し、また責任者として頑張りたい。しかし、原因は手続きの不備にのみあるのではないように思われる。話題のバランスの問題も大きいのではないだろうか。つまり、畜産に関する発表に大きく偏り、その他の動物が非常に少ない。当初から見ても増加していない。応用動物行動学会としては、畜産動物以外の動物に関わる方々を、何とかしてもっと呼び込む努力や工夫が必要であろう。もちろん、応用動物行動学に関心を持つ母集団として、畜産関連の人達に比べればその他の人達ははるかに小さいものであろう。しかし、その人達に関心を持ってもらうことは、本学会の発展にとって大きな意味を持つことは明らかである。どのようにすればそうした人達を引き込めるかが、早急に考えるべき重要な課題だろうと今回の発表を見て感じた。発表会後の懇親会は、いつもながら熱気沸き立つもので、50名を越える人達が淵野辺駅前の居酒屋に集まった。例年通りの学生達の自己紹介もあり、小さな学会の良さは発揮されたと思う。このコンパクトさを大事にしつつ、多様性に富んだ学会にする工夫をこれから考えていきたい。

◇ 2007年度総会報告

副会長(事務局長) 森田 茂(酪農学園大学)



1. 総会の開催

2007(平成19)年度応用動物行動学会総会が2007年3月28日12:30より13:00まで、麻布大学8号館8502教室にて開催された。前日行われた評議員会での議論をふまえ、事前に配布した資料に沿って2006年度活動報告、会計報告、会計監査報告がなされ、承認された。また、2006年度事業計画案および予算案

が提示され、審議のうえ、承認された。

事前配布資料の修正および追加説明

- 1) 学会誌:3/28 現在の受理論文数は3件、審査中は3件である。
- 2) 「最近の応用動物行動学研究 総説」
提案された項目と執筆者案を近藤会長が、執筆予定者の意見を聞きながら再度検討し、編集業務は会長が行いとり進める。
- 3) 本会の会議はメーリングリスト上でやっている。メールベースでの幹事会・評議員会などの内容を、事務局長が担当し記録することとなった。
- 4) 投稿規定の見直しを、編集担当副会長が検討する。
- 5) 予算上での「予備費」と「繰越金」の扱いを、会計担当幹事が検討し、監事とも協議の上、2008年度予算表記に反映させる。
- 6) シンポ関連:岡山での日本畜産学会にあわせ現地見学会の開催(日本家畜管理学会と共催)およびエンリッチメント関連のシンポジウム開催、実験動物関連のシンポを検討する
- 7) 国際応用動物行動学会議への研究者派遣該当者として、二宮 茂(東北大学) 会員が決定した。総会の最後に贈呈式を行った。



2. 役員名簿 (任期 2008/2/29 まで)

会 長 近藤誠司(北海道大)

副会長 上野吉一(霊長研, 大会委員長)、

森田 茂(酪農大, 事務局長)、

植竹勝治(麻布大, 学会誌編集委員長)

シンポ担当幹事 青山真人(宇都宮大)

会計担当幹事 出口善隆(岩手大)

会員担当幹事 瀬尾哲也(帯畜大)

ニュースレター担当幹事 河合正人(帯畜大)

通信担当幹事 竹田謙一(信州大)

無担当幹事 友永雅巳(霊長研)、内田佳子(酪農大)、加隈良枝(帝京科学大)、

矢用健一(生物資源研)、楠瀬 良(JRA 総研)、田中智夫(麻布大)、

佐藤衆介(東北大)

監 事 杉田昭栄(宇都宮大)、柏村文郎(帯畜大)

3. 評議員名簿（任期 2008/2/29 まで）

安江 健(茨城大)、長谷川信美(宮崎大)、安部直重(玉川大)、山田明央(畜草研)、岡本全弘(酪農大)、松井寛二(信州大)、小迫孝美(畜草研)、小針大助(茨城大)、中西良孝(鹿児島大)、尾形庭子(どうぶつ行動クリニック・FAU)、森 裕司(東大)、松浦晶央(北里大)、梶 光一(農工大)、坪田敏男(北大)、鈴木正嗣(岐阜大)、池田 透(北大)、仲谷 淳(近中四農研セ)、江口祐輔(麻布大)、塚田英晴(畜草研)、羽山伸一(日獣大)、織田 銑一(名古屋大)、石井 澄(名大)、松尾貴司(愛知淑徳大)、小山幸子(Indiana 大)、石田 戢(帝京科学大学)、菅 豊(東大東洋研)、木村李花子(馬事文化研究所、インド)

4. 2006年度決算

1. 一般会計

項目	収入(円)		支出(円)	
	2006 予算	2006 決算	2006 予算	2006 決算
前年度繰越金	168,070	168,070	会誌発行費	250,000 216,804
個人会費	290,000	232,000	シンポ・学会費	40,000 0
賛助会費		0	会議費	1,000 0
雑収入	1,000	7,801	通信費	30,000 1,000
			消耗品費	5,000 0
			謝金	3,000 0
			手数料	1,000 900
			予備費	129,070 0
合計	459,070	407,871	合計	459,070 218,704
収支差額	189,167 円 (次年度繰越)			

2. 特別会計

項目	収入(円)	支出(円)
前年度繰越	3,026,977	研究発表者派遣補助 0
利子	1,253	(規定未整備のため派遣なし)
		役員派遣補助 200,000
		(ISAE2006 近藤誠司)
合計	3,028,230	合計 200,000
2006 年度末基金残高	2,828,230	

5. 2007年度予算 (2007.03.01～2008.02.29)

1. 一般会計

項目	収入(円)		支出(円)	
	2007 予算	2006 予算	2007 予算	2006 予算
前年度繰越金	189,167	168,070	会誌発行費	280,000
個人会費	276,000	290,000	シンポ・学会費	30,000
賛助会費	0	0	会議費	1,000
雑収入	1,000	1,000	通信費	1,000
			消耗品費	1,000
			謝金	2,000
			手数料	1,000
			予備費	40,167
			次年度繰越金	110,000
合計	466,167	459,070	合計	466,167

2. 特別会計

項目	収入(円)	支出(円)
前年度繰越	2,828,230	研究発表者派遣補助
利子	1,200	役員派遣補助
		市民公開シンポ
		送金料など
合計	2,829,430	合計

2007 年度末基金残高(計画) 2,378,430

◇ 日本家畜管理学会共催2007年度春季シンポジウム報告

シンポジウム担当幹事 青山真人(宇都宮大)



2007年3月29日、麻布大学にて、応用動物行動学会・日本家畜管理学会共催シンポジウム、「ヒトと家畜双方の幸せを行動から評価する」が開催され、麻布大学の石渡俊江氏に「肉用牛における飼育環境の総合評価と環境エンリッチメントの方策に関する研究」、東北大学の二宮茂氏に「舎飼ウマにおける欲求不満並びに行動充足の行動的指標探査とそれらを用いた飼育環境の福祉性評価」、北里大学の松浦晶央氏に「ウマおよび騎乗者の振動解析－障害者用乗馬の評価の可能性－」について講演を頂いた。講演者の3氏は、昨年度に博士号を取得され、学位論文の内容を発表して頂いたのであった。それぞれの話題の詳しい内容は東北大学院修士生の遠藤幸洋氏による報告に譲るとして、青山が感じたこ

とを二つ書こう。

一つは、2002年の応用動物行動学会設立に伴い、発展的解消をした、「家畜行動小集会」の伝統の素晴らしさである。家畜行動小集会には、学位を取り立ての若手研究者に自分の仕事を紹介して頂いて、調子に乗る前に皆で叩こう、という悪しき？伝統があった(私事で恐縮だが、最後の家畜行動小集会としての講演者は、信州大の竹田氏、九州東海大の伊藤氏、そして私であった。2001年9月、信州大での講演であった)。他の大学の研究を聴く機会といえば学会であるが、学会発表だと大きな研究の流れの断片のみを聴くことになってしまう。学位論文として一つ完結した形を聴くことで、初めて「そうか、こういうことだったのか」と分かることもあるし、それまでは気が付かなかった問題点に気付くこともある。この伝統は、これからも続けて行きたいものである。

もう一つは、動物の「快・不快」や、ヒトと動物の関係の円滑さを、行動から測定するという課題において、実験デザインや解析方法が進歩・多様化しているということである。動物の行動から分かる動物の本質は、まだまだ引き出せるのだ、ということを感じた。行動学者にはまだまだやることが残されている。

最後に、今回のシンポジウムは、1年前から企画自体はあり、3氏への講演依頼は前シンポジウム担当の安江先生(茨城大)がすでに行っておられたので、私は連絡を取るだけで済んだ。安江先生、お疲れ様でした。また、シンポジウムの会場設定においては、開催大学であった麻布大学の皆様にお世話になった。特に講演者でもあった石渡さん、学会場設定係と、畜産学会・応用動物行動学会の研究発表会でも複数の発表を抱えながらのシンポでの講演、本当にご苦労様でした。

◇ 電子ジャーナルへのアクセス方法について

副会長(学会誌編集委員長) 植竹勝治(麻布大)



Animal Behaviour and Management(日本家畜管理学会誌・応用動物行動学会誌)に掲載された論文(バックナンバーを含む)は、国立情報学研究所の電子図書館(NII-ELS)においてPDFでの閲覧が可能です。両学会の会員は、無料での閲覧が可能です。ただし、閲覧にあたっては、個人々人でのID登録が必要となりますので、はじめてご利用になる際に、次の手順で新規登録を行ってください:

- ① 国立情報学研究所CiNiiトップページ(<http://ci.nii.ac.jp/>)のログイン画面で、「新規登録」をクリックする。
- ② 利用申請 > 申請種別選択画面で、「個人ID申請へ」をクリックする。
- ③ 利用申請 > 利用規程画面で、「同意する」をクリックする。
- ④ 利用申請 > 利用者情報入力(個人ID)画面で、必要事項を入力する。

その際には、必ず、オプション設定の中の「ELS参加学協会員申請」の「選択」をクリックし、選択項目の中から「日本家畜管理学会」を選択*するようにしてください。それによって、コンテンツ利用料が割引(無料)になります。(*日本家畜管理学会が代表機関として国立情報学研究所と契約を結んでいるため)

◇ 通信・ホームページ関連のご案内

通信担当幹事 竹田謙一(信州大)

既にご案内していますように本学会のホームページアドレスが昨年5月から替わっております。パソコンのお気に入り設定されている方は、変更をお願いします。

http://karamatsu.shinshu-u.ac.jp/lab/ethology/jsaab_index.htm

HPの更新は、ML(jsaab@shinshu-u.ac.jp)を通じて皆さまにご案内します(4月20日(金)に更新予定)。また、MLも是非、情報発信、獲得にご活用下さい。信州大学のサーバーを介しているため、学内のトラブルやメンテナンスにより、不都合が生じることもありますので、この点についてはご容赦下さい。



◇ 学会年会費納入のお願い

会計担当幹事 出口善隆(岩手大)

年会費を未納の方は、年会費(2,000円)をお振り込み下さるようお願い申し上げます。本年度(2007年度)会費未納会員は82名、2006年度会費未納会員は10名となっております。本学会の収入は個人会費のみです。未納会費金額は、2007年度予算の個人会費収入金額の67%に相当いたします。このような状況が続けば学会活動に支障が出ることも予想されます。本学会財政を健全化するために、学会年会費のすみやかなお振り込みをお願いいたします。

お振り込み方法

「郵便振替口座」に、年会費をお振り込みください。

加入者名 応用動物行動学会

口座番号 02790-9-13298

なお、お手数ですが、お振込みには郵便局に備え付けの「郵便振替払込用紙」(青色、振込人が振込料金を負担する用紙)をご利用ください。

過去の年会費振り込み状況がわからない場合は、

会計担当幹事: 出口善隆 (deguchi@iwate-u.ac.jp) までお問い合わせ下さい。



◇ 2007年度春期シンポジウム参加報告

遠藤幸洋(東北大学大学院農学研究科・博士前期課程2年)

2007年3月29日(木)に麻布大学において応用動物行動学会・日本家畜管理学会共催シンポジウム「ヒトと家畜双方の幸せを行動から評価する」が行われました。3名の先生からの発表と質疑応



答がなされ、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。僭越ながら講演内容に私見を交えつつシンポジウム報告とさせていただきます。

1. 石渡俊江先生(麻布大学獣医学部)「肉用牛における飼育環境の総合評価と環境エンリッチメントの方策に関する研究」

放牧か舎飼かという施設環境の違いによってウシに対する様々な刺激が異なることは容易に想像できる。ウシは多くの行動を摂食行動と結び付けて行うことが多く、放牧と舎飼では給与飼料が全く異なる。そのため、舎飼では摂食行動時間が少なくなるが、その一方で身繕い行動や舌遊びのような Oral behavior が多くなる。舎飼牛において Oral behavior は少ない摂食行動を補うために現れるものであり、これまで異常行動とされてきた舌遊びなどの行動は短期間であれば異常行動ではなく、その環境に適応するために意図的に行っている行動であるという解釈が示された。ドラム缶の飼槽あるいはそれに人工芝を取り付けた身繕い飼槽の設置による環境エンリッチメントは社会的順位により利用されやすさが異なるが、その効果として採食や身繕い行動を促進し、長期的な生理指標への作用を通じて、枝肉成績を向上させたことは非常に興味深い知見であった。また、何が環境エンリッチメントとなりうるかの選択試験では、仲間との隔離やヒトとの接触が負の要因となりうることが示された。

環境に適応するために行う行動は、それができない個体もいるのではないかということも考慮しなければいけないが、これによりどういう個体がどういう飼育環境に適しているのかを知る手掛かりになりうると感じた。環境エンリッチメントは社会的要因の影響を緩和するために設置方法の工夫が必要であるが、視覚や接触等の刺激の中には環境エンリッチメントになりうるものが多くあり、行動からそれを理解し飼育環境にそれを取り入れることで、家畜の快適性が向上しそこから生産されるものがヒトにとって有益なものとなり、ヒトと家畜双方の幸せを我々がコントロールする手掛かりとなると思う。

2. 二宮茂先生(東北大学大学院農学研究科)「舎飼ウマにおける欲求不満並びに行動充足の行動的指標探査とそれらを用いた飼育環境の福祉性評価」

これまでの動物福祉の総合評価として施設・環境および管理に関する項目については飼育環境を評点化する ANI 法などが確立されている。また、行動、生理、免疫、神経学的な側面から動物の反応を評価する方法も存在し、後者が福祉の本質を捉えるものとして考えられるが、評価方法が困難であるなどの理由から用いられることが少なかった。また、両評価方法が一致するかも疑問点が残る。舎飼ウマにおいて、欲求不満時に起こる低福祉指標として熊癖やさく癖が知られているがこれらは欲求不満状態がある程度発達した段階で起こり、常同化するため行動指標として適さず、欲求不満を初期段階から捉えられる新たな行動指標が必要だと考えられる。そのなかで、行動観察により既知の失宜行動と関連があり、且つ発現頭数や発現頻度の多い敷料探査行動が低福祉指標となりうることが示された。さらに、これまでの福祉指標として用いられたことのなかった喜びなどの正の情動と関連する行動指標の探査としてオペラント条件付けを利用し、行動充足時に多くなる立位睡眠行動が高福祉指標となりうることが示された。また、実際にこれらの指標を用いて評価を行った試験においても飼育環境の改善や飼育環境エンリッチメントの福祉評価が欲求不満と行動充足の行動指標を用いることで可能であることが示された。

フロアから舎飼と放牧では本来の行動レパートリーが異なっておりこれらを同一の指標で評価するのは限界があるとの指摘があった。これに同感する部分もあったが、

福祉評価を行う場合、舎飼あるいは放牧によって評価法を変えるのではどちらかの評価に偏りが生じる可能性が大きいのではないかと思う。この点を考慮し行動指標を探索していくことは今後の課題であるが、欲求不満と行動充足の行動指標により評価することは、飼育環境にとらわれずに通用する有効な評価法であるように思う。

3. 松浦晶央先生(北里大学獣医畜産学部)「ウマおよび騎乗者の振動解析－障害者用乗馬の評価の可能性－」

ウマはこれまで役用、運搬・乗用ならびに競争用としてヒトと関わりを持ち、これらに必要な体力や持久力あるいは敏捷性といった観点から育種改良が行われてきた。近年では、動物介在活動あるいは動物介在療法が注目されている。ウマは騎乗者に物理的刺激を与えることにより、ヒトの姿勢調節機能、歩行機能、自律神経機能、及び心理状態などに好影響を与えることが知られている。障害者乗馬において、足が不自由な人は、普段味わうことのできない歩行による体の振動を、馬上なら自分の体が3次元的に揺れ動くことを体感でき、また、脳性マヒなどの障害を持つ人は、ひとつの関節だけを動かすことが困難なため、歩くときにも体全体を使わなければならないが、乗馬を続けていると体の分離運動が可能になり、スムーズに歩けるようになる。このように乗馬による振動がヒトの健康・福祉に有益であると考えられる。振動は加速度の二回積分から位置情報を求めフーリエ解析により周波数と振幅を算出することで解析できることが示された。この振動解析により、騎乗者(経験者、初心者あるいは障害者)によって振動は異なり、また、ウマの体型や気質によっても騎乗者の振動が異なることが示された。このことから振動解析により障害者乗馬を評価でき、どのような体型および気質のウマがどのような障害のある人を騎乗させるのに適しているのかを判断できる可能性が示された。

ウマの振動が騎乗者に有益であるので、これから乗馬をする人が多くなることが予想される。これによってウマの活躍の場が多くなると伴にウマが酷使される可能性が考えられる。そのウマの労力の軽減となるためにも振動解析による評価がウマ側の福祉にも利用されることを期待したい。それがヒトと家畜双方の幸せに結びつくのではないかと思われる。

最後に、シンポジウムや発表会ならびに懇親会を通してたくさんの方々のお考えに触れることができ、また多くのご助言を賜り、大変刺激的で実りのある数日間を過ごさせていただきました(非公式の場でもいろいろと...)。この場をかりて御礼申し上げます。また、今後ともご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

◇ 編集後記

相模原での研究発表会およびシンポジウム、お疲れ様でした。とくに麻布大学の皆様には大変お世話になり、ありがとうございました。関東ではすでに桜も散ってしまったとのことですが、北海道内各地、帯広でも4月半ばを過ぎたこの時期に15cmを超える降雪です…。さて、今年度第一弾のニュースレターは発表会報告、シンポジウム報告を中心にこれまで一番のボリュームとなっております。しかし、一般会員の方々からの投稿がほとんどございません。本学会をますます盛り上げていくためにも、会員の皆様には、御意見や掲載記事など是非お送り下さいますよう、御協力の程よろしくお願い申し上げます。(ニュースレター担当 河合正人: kawaim@obihiro.ac.jp)

